

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

住めば都のアルビオン

【作者名】

ごんべえ

【あらすじ】

住めば都のコスモス荘の桜崎鈴男が
ルイズに召還されるクロス物です

一応アニメ終了後な感じですが

技とかはこんな事いいそうだなのオリジナル仕様です

yahooブログにも載せてますが

こっちの方が読んで貰えるかと思ひまして

拙い文章ですが楽しんで下さい

ってかアルビオン、じゃねえよ、アルビオン

オン

だよ、間違えててごめんなさい

「株式会社オタンコナス製造超汎用パワードスーツドッコイダー参上
おい、マロンフラワー 貴様の悪事も今日までだ

今日こそそのお縄を頂戴する」

どこかとぼけた感じのヒーローがいかにも悪の科学者風の老人に
言った

「カーカッカ、片腹痛いは貴様のそのセリフ何度聞いたことが

しかし、それも今日までこのオルゴールメカで貴様の熱血 波を打
ち消して

そのマスク剥ぎ取ってやるわい」

そういうと同時に老人の後ろから手足のついた大きな手足のつ
いたオルゴールが出てきた

「ふふ、私の熱血 波はそんなのに打ち消されはしない

食らえ、スーパーデリシャスダイナマイトキッ~~~~ク」

そう叫ぶとヒーローは高く飛び上がり

ロボットに向かって必殺技を放った

「クリーカ、妨害電波最大じゃあ~~~~」

そういうとロボットが

「了解しました、マスター、熱血 波妨害音波照射」

ロボットがそういうと当たり一帯に非常に不愉快な音楽が流れ始
めた

「く、い、意外にやるな、マロンフラワー」

しかし、私も常にパワーアップしているのだ

くお~~~~、必殺

マンションやアパートに住んでたら隣の部屋がうるさくて
イライラするよね、だけど隣からしてみれば自分の部屋も

相当うるさいんだよねだけど壁をたたいたいちゃう~~~~ンチ」

わけのわからないというか無駄に長たらしい名前の必殺技をいい

ロボットに向かってロケットのようなパンチを繰り出す

「ふん、貴様のへナチョコパンチ程度受け止めてやるわい」

そついい、ロボットはガードの姿勢をとった

両者がぶつかりそうなきときよりもちよっと手前で

ヒーローは体制を崩した

周りにはわかつていた

キックといいながらの頭突き

すなわちパンチという名の頭突きがくることが

しかし、自体はさらにおかしな方向へ

体制が崩れた方向になにやら銀色の鏡のようなものが出現したの
である

「うわわわわ、な、なんだこれは、す、吸い込まれる〜〜」

ドッコイダーはそう叫びながら鏡に吸い込まれていった

「おお、おい、ドッコイダーどこへ行くのじゃ

勝負をほっぽり出して逃げるとは正義の味方の風上にも置けぬぞ」

老人がいくら叫ぼうが誰も答えなかった

「帰るかのう、おい、クリー力撤退じゃ」

そついと寂しそうに老人は去っていった

「ゼロのルイズが成功するわけないじゃん」

桃色の髪の毛の少女を遠巻きで囲みながらみんなが揶揄する

それでも少女は必死に呪文を唱えていた

「私にふさわしい宇宙一の使い魔よ、出てきなさい」

必死に杖を振り、願っていた

ボカン

その願いはかなった

ある一点を除いて

そつある一点

そつそれは明らかに平民であった

地面に頭から突き刺さりピクピクとしている

少女「あ、起き上がった」

その光景にみんながあっけにとられていた

「あ、あれ、」じびじだ、あ、あれ、変身が解けてる

というかこれはあれですかラ致ですか

ヒーローをラ致ってどういうことですか

北 鮮の仕業ですか、いや新たな悪の秘密結社の可能性も

いやいや、その前に正体ばれちゃったかも、やばいやばい

小鈴、応答してくれ~~~~~」

起き上がったってわめき散らす少年を見ながら少女は

「先生、やり直しをお願いします」

頭部の輝きがまぶしい先生が

「ルイズ君、それはできないのだよ、いくら呼び出してしまったのが

平民とはいえサモンサーヴァントは神聖な儀式

やり直しは効かない」

そういわれ、仕方なしに青年に近づいていく

「おお~~~~、お嬢ちゃん丁度いいところだ」

ちよつといいかい、ここはどこ、というか誰が僕をさらったの」

あれよあれよと少女に質問をぶつける

「黙りなさい、平民、ありがたく思いなさい」

貴族様にこんなことされるなんて一生ないんだから」

そういうと少女は背伸びをして青年の口に自分の口を重ねた

「へ、なに、なに、これは俗に言うあれですか、

キスは歓迎の挨拶だよ、外国じゃ当たり前的な」

少女にキスされたことかわいそうな彼の脳みそは

すでにいっぱいいっぱいだったにもかかわらず

その用量を超え、オーバーヒートしてしまった

しかし、そんなことよりも青年の左手に異常な痛みが走った

「が~~~~~、なな、何ですかこの痛みは~~~~~」

を~~~~~痛い~~~~~」

そついい青年は転げまわった

しかし、すぐに痛みは治まり

立ち上がり左手の甲を見るとそこには見慣れない文字が書かれていた

その文字を見た先生が

「実に珍しい後で調べて見ましょう」

そういい、スケッチを取っていた

そうこうしている間に少女が

「あんだ名前は」

高飛車な態度になぜか瑠璃ちゃんやエーデルワイスを思い出し

つつい、笑顔がこぼれしまう青年であったが

「お嬢ちゃん、名前を聞くときはまず自分から名乗らないといけないよ

僕の名前は桜崎鈴男、君のお名前は」

少女の頭をなでながらやわらかい物腰で少女に聞いた

しかし、少女はその手を払いのけて

「ふん、平民風情が触れるな、私の名前はルイズ

わかった、これから一生お世話になるご主人様の名前よ

その頭の悪そうな頭にすっかり刻み付けておきなさい、下僕」

そういわれ啞然としていた

ご主人様、下僕

そう言われついに彼の頭は処理の限界を向かえ

煙を噴出しながら倒れてしまった

「う〜ん、変な夢を見てしまった

いきなり小さな女の子にキスされる夢なんて

僕はロリコンだったのか、そんなわけないかあははは」

「あんだ、いつまでそうしてるの、早く起きて私の着替えを手伝いなさ

い

「へ？」

青年が気づくとそこは見知らぬ天井であった

少女、ルイズの話を聞きながら

彼女の着替えを手伝う鈴男

話をまとめると

どうやらサモンサーヴァント？と呼ばれる

魔法？によって異世界？もしくは宇宙のどこかの星に転送されてしまった

通常はこの世界、星の生物を呼び出すらしいのだが

今回は偶然か必然か、青年桜崎鈴男を呼び出してしまった

「う〜ん色々わからない」ともあるけど、なんとかなるか」

青年は特に考えることもなく、むしろ考えることができないのだがこの状況を受け入れた

日中はご主人様であるルイズと特別に授業に参加といいつつの居眠り

なのですぐに追い出され

一日の大半はルイズの言いつけた仕事や

学園の雑務の手伝いをする事となった

食事は貴族と一緒にとることができないので

厨房の手伝いをしてその後まかないを厨房のみんなと食べることになった

ここで天使のように可愛いシエスタ出会い

色々とこの世界のことを仕事の合間に教えてもらう

ここ一週間生活して新たにわかったこと

この世界は魔法と呼ばれるものが存在するということ

ようはファンタジーの世界であり

科学があまり発展していない

そして魔法が使えるもの使えないもので階級が分かれる、貴族と平

民

「僕も魔法使えないかなあ」

「あははは、それは無理ですよ

魔法は生まれもって使える使えないが決まるんですから」

シエスタと一緒に洗濯をしながら雑談をする

それが彼にとっての日課になっていた

「そうか、それは残念、僕にもきらめくファンタジーライフが訪れると思ったのに」

青年は非常に残念がっていた

「そういえば、スズオさんはどこからいらっしやっただんですか？」

「うーん、そこが僕にもよくわからないんだよ

日本って言うてもわからないでしょ、こっちに来てからいろいろ聞いてるんだけど

いまいちみんなと会話がかみ合わないんだよ」

「ニホン、聞いたがあるようなないような、どんなところなんですか？」

「ここみたいに魔法は使えないんだけど、その代わり科学ってのが発展して

貴族、平民ってのがなくてみんな平等に暮らしてる世界かな」

「カガク？ ですかでもみんな平等ってのはいいですね」

「ちよつと駄犬、いつまで洗濯してるのよ」

楽しく談笑しているとご主人様がいきなり後ろから現れた

「あ、ルイズ、なんか用？」

「なんか用？ じゃないわよ」

あんななんかなんも能力ないんだから、馬車馬のごとく働き続けな
いといけないの」

そういつて首根っこをつかんで青年を連れ去る少女

「スズオさん、後は私がやっときますね〜」

それを少し心配そうにシエスタが見送った

「はやく、片付けなさい」

青年が連れられてきたのは最近あまり顔を出さない教室である

そこは前見たときとは違い

一面黒こげで汚れにまみれていた

「ルイズ、何があつたんだ」

「余計な口をきく暇があつたらさっさと片付けなさい」

といい青年のお尻を蹴り飛ばし

一人教室に残し去っていきこうとする

「え、一人ですか？ 手伝ってくれないの？」

青年が起き上がりながら問う

「私は忙しいの、明日の朝までお願い」

そついい姿が消えてしまった

しょうがないのでしぶしぶ掃除を始めた

「なんで、ルイズは魔法が成功しないんだらう」

そう、彼女は貴族でありながら

魔法が使えないのである

そこには少し語弊があるかもしれない

使えないというよりは失敗する

発動するとどうしても爆発してしまう

だからこうやって教室を丸焦げにしてしまうこともたびたびらし

い

彼女の二つ名は『ゼロのルイズ』

彼は周りに人の気配がないのを確認して

「よ〜〜〜し、誰もいないな

変身っ！

株式会社オタンコナス社製造超汎用型パワードスーツ

ドッコイダー

異世界の荒波にも負けず参上」

どこかとぼけたヒーローに変身した

「さて、ちゃっっちゃと終わらすか

必殺

掃除は上から下にやらないと二度になってしまつてしまつてしょスイープ

ここで登場奥様のお掃除の味方、割り箸と布切れで完成ドッコイ
棒、

決して松 棒のパクリではありませんからスラッシュユ

こんなもんか」

訳のわからないことをわめきながら

めまぐるしく教室を駆け回っていたと思うと

瞬く間に教室はピカピカになっていた

「我ながら完璧だ、さて誰かが来る前に

ナナムギナマゴメナマタマ」

そつとなえるとスズオの姿はいつもの姿に戻っていた

「さてそろそろ洗濯物が乾いているころかな」

そついい洗濯場に戻っていった

シエスタが干していてくれてたの洗濯は物はもう乾いていて
すぐに取り込むことができた

それをもつて部屋に戻る

そこでは熱心にルイズが勉強していた

「あら、早かったわね、この掃除の早さだけはあなたを使い魔にしてよ
かったと思うわ」

そっいい勉強に戻る

彼女は魔法は使えない

けど何も努力をしていないわけではない

人一倍誰にも負けなくらい勉強している

けれど使えない

才能というものだろう

そんな姿を見るたびに彼は思った

可哀想だと

夜、彼女が寝静まったころ彼はこそっと寝床を置きぬけた

そして変身して森に向かった

「やはり、地球で変身したときより力があふれてくる

この世界の魔法の力が何か影響しているのか」

ここ最近かれは変身しているとき

いつもと違う違和感を感じていた

力強い感じを

「試しにちよっつこの木を、ふん、」

ドゴン

「へっ」

木がふつとんだ

いつもなら木がへし折れる程度に力を抑えたつもりが

今日は違った、後ろにあった木々も巻き込んでちょっとした大惨事
になっていた

「な、なんじゃこりゃ~~~~~」

そう叫び彼は逃げていった

「ザ…ザザ…ド…ザッザ…ダー、ドッコイダーザザザザザザ」

通信機から聞こえる少女の声の声に気づきもせず

「な、なに〜、小僧が行方不明だとおお」

「そうなんです、この間の戦闘の途中、行方不明になってから連絡が取れないんです」

「私たちと戦ってるとき急にいなくなりましたね」

「コスモス荘の鈴男の部屋に全員が集まっていた」

「ちよっと、私のコーチをどこへやったのよマロンフラワー」

「娘っ子、ワシのメカに転移装置なぞつけておらんわ」

「ワシはてっきりワシの恐ろしさに驚きおののいて逃げたもんじゃとばかおもっちゃったは」

「鈴男ちゃんがあんたなんかのメカにビビッて逃げるわけないでしょ」

「でもお、じゃあ、あいつはどこに行ったんだ？」

結局答えが出ぬまま全員頭を抱えてしまった

「コスモス荘の諸君…」

消えていたはずのテレビからいきなり声がした

そこにはモグラが男の男が写っていた

「ドッコイダーの行方がわかったぞ」

「今日もいいお天気だなあ」

幸薄そうな青年が気持ちよさそうに洗濯をしていた

「おっと、今日はシエスタと三時の給仕の手伝いだった」

そういうとあわただしく片づけをして足早に中庭に急いだ
みんなの心配をよそにこの世界での生活を満喫していた

どこの世界でも貴族は貴族である

三時のお休みの時間は中庭でおやつタイムである

「じ〜ん、ズイビー、君は今日も天高く浮かぶ太陽に輝いてるよ」

「そ、そんなギーシュ様だったら、あ、あの。よかつたらこれクツキーなんですけれども食べていただけますか」

「お〜、僕のために焼いてくれたのか、ありがとう、もちろんいただきますよ」

「ギーシュ様紅茶をお持ちいたしました」

タイミングよくシエスタが紅茶を運んできた

「ありがとうメイド君」

2人は楽しく談笑していた

シエスタが次のテーブルにお茶を出すために戻る途中

「あれ、これなんだろうなんかずいぶん高そうな香水、誰かのおとしものかしら」

職員室にでもついでいこうとしていると

「ちょっと、そのメイド」

いきなり呼び止められた

「その香水どこで手に入れたの」

金髪の縦ロールのお嬢様モンモランシーだった

「あ、先ほど拾ったものなんですけどモンモランシー様のものですか」

そついい香水を手渡した

「これはギーシュにあげたやつじゃない、落とすなんて最低、ちょっとギーシュ知らない」

「ギーシュ様でしたらあちらにご案内いたしますしゅうか」

「ええ、とつちめてやらないと」

そついいギーシュのテーブルへ案内するが

途中で彼と楽しそつに会話してる女性とが目に入ると

「ギーシュ、これはどういいうこと、あなたが好きなのは私だけっていったじゃない」

横からいきなり現れたモンモランシーに虚をつかれたギーシュはシドロモドロしていた

「しかもあまつさえ、私が特別にあなたに調合したこの香水を落とすたなんて、ほんと、最低許さない」

バシン

モンモランシーに頬をたたかれて地面に突っ伏してしまったギーシュ

そこに追い討ちをかけるかのように

「ギーシュ様二股をかけてるだなんてヒドイです、あんまりです」

そついい、泣きながら去っていった

この一部始終はその場の全員に見られており

クスクスと笑われてしまっていた

ギーシュは立ち上がると

「おい、メイド、貴様が香水を拾ったのか」

すごい剣幕でシエスタは迫られびくびくしながら

「はい、そうです」

「貴様がモンモランシーをここに案内したんだな」

「はい、すみません」

「貴様のせいで僕はみんなの笑いものだ

貴様が香水さえ拾わなければ、モンモランシーさえ連れてこなければ

ば

八つ当たりもいいところだが所詮貴族と平民埋めても埋めても埋まらない差がある

彼女はただ運が悪かったのだ

彼女をたたこうとギーシュの右腕が高く上がった

バシン

そついう音が聞こえると思った

しかししなかった

振り上げられた腕を

鈴男がつかんでいた

「だめだよ、どんなことがあったって男の子が女の子の子に手を上げちゃ

いけない」

そしてシエスタとギーシュとの間に入った

「何があったか知らないけど女の子に手上げるのはだめ、男なら我慢しなさい」

そっぴいシエスタに向かって

「大丈夫かい、怪我はない」

やさしく気遣いをしていた

「なら、貴様、その女に変わって決闘だ、たかだか使い魔の首ひとつ刎ねても問題なかるっ」

「な、なんですと~~~~~」

たかだか子供同士の喧嘩、ちよつと輪にればすぐ収まると思ったが
思わぬ形で火の粉が飛んできてしまった

あふれ出る正義感ゆえの行動だが激しく後悔をしている鈴男

しかし、状況は変わらなかった眼前にはギーシュが薔薇のような杖を構えていた

「まあ、今なら土下座してあのメイド共々謝るなら半殺しで許してやる」

そっぴわれたがいくらビビリの鈴男でも相手が悪いのに謝る気などなく

しかもどうせ子供と高をくくっていた

「そっちこそ、あんな態度をとってシエスタに謝れ」

「そっか交渉決裂だな、では行くぞ」

そっぴいギーシュが杖を振ると薔薇の花びらが舞った

花びらが地面に落ちるとそこから土が盛り上がった

土は瞬く間に西洋の甲冑の姿をとり各々がさまざまな武器を持っていた

「へ、な、なんですかその技は」

たかが子供と高をくくっていたため啞然としていた

「ふふ、君よけないと死ぬよ、行け僕のワルキューレたち」

その言葉とともに甲冑たちが動き出した
その動きはぎこちないものだが

ドゴン

甲冑の攻撃をぎりぎりでもよけた鈴男、しかしその一撃は地面をえぐっていた

「ちよちよ、し、死ぬって、まじでやばいよ」

戦局は明らかだった

3体のワルキューレたちに追い詰められるがギャグ補正で常人離れした動きで回避する

「へ〜、なかなかやるね、でもいつまでも逃げてられないよ」

そういい、さらに杖を振る

その言葉に危険を感じた鈴男はその場を離れた

ザス

一瞬前までいた場所に大きな刃物がつき刺さったような穴が開いた

「ちよつと、これはやばいよ、た、たんま」

「はは、いくら君でもワルキューレとこの見えない刃エアカッターを混ぜられたら危ないよね」

そついいお互いは一定の距離を置いてにらみ合った

「バカ犬、何してるの!!」

野次馬の中からルイズの声がした

そちらへ顔を向けると野次馬を掻き分けルイズがでてきた

「バカ犬、何をやらかしたか知らないけど、ギーシュに謝りなさい」

「やだ」

「なに、ぐだぐだ言ってるの、謝りなさい、あんたがどうあがいても貴

族には勝てないの」

「ルイズ、これは男と男の決闘だ、女はでしゃばらないでもらえるかな
まあ、あれだ素手ではかわいそうだ」

そついうと杖を振る、すると鈴男の目の前に一本の剣が現れた

「ルイズ大丈夫、正義は勝つ」

そつ言い、剣を抜いた

「うお~~~~、なんか力があふれてきた」

いつの間にか左手の甲のルーンが光り輝いていた

「学園長、これを見てください」

「なんだね、ノックもなしにいきなり部屋に入ってきておつて」

学園長室のドアを勢いよく開けたコルベルは机に深々と腰掛けた老人に一冊の本を差し出した

「ルイズが召還した使い魔のルーンが珍しいものだったので調べていましたら、始祖ブリミルの使い魔ガンダールヴのものと一致しました」

そつ言葉に学園長も気だるげなめを見開いた

「まあ、でもちよつどいい、今まさにその使い魔とグラモン家の三男が決闘をしておる」

その話が本当ならこの決闘見ものになるよのお」

「うお~~~~、勇気が正義があふれてくる」

そついうとすばやく3体のワルキューレたちを片付けた

「はは、やっと本気になったか使い魔君、ならこつちも本気だ」

そついうと目の前に5体のワルキューレが現れた

それらが一斉に鈴男めがけて襲ってきた

「多勢に無勢つて卑怯だぞそれでも貴族か」

そついいながら一体、また一体と片付けていく

その合間にもギーシュがエアカッターを放ってくるがそれを物と
もせず

すばやくよけ状況をどんどん有利に持っていく

「ははは、僕って変身しなくってもこんなにすごかったんだあ
そういつつ最後の一体を切り捨てた

そしてその刃をギーシュに向けた

「どうだい、降参するか」

精神力を使い果たしてもう魔法を使えないギーシュはただの人、平民
と大差ない

しかし、この男はまだ余裕を持っている殺される

すさまじいまでの恐怖をギーシュは気絶してしまった

ギーシュが気絶すると鈴男の持っている剣が土に帰っていった

周りで切り捨てられて倒れていたワルキューレたちも土に帰って
いった

「勝ったの？」

その光景を啞然と見ていたルイズは素晴らしい鈴男の元にゆっくり
歩み寄っていく

「あんた怪我は？」

「ああ、大丈夫だよ、ごめんね、心配させて」

「もう、心配かけるんじゃないわよ」

2人は広場から去っていった

周りのものは貴族が平民に圧倒させられたというこの事実を飲み
込めずに動き出せなかった

「今日は休みだから街まで行くわよ」

「へ、街に、なんで」

「剣を買いに行くのよ、あなたは使い魔、私の護衛なんだから」

そついいい、身支度をして街へと馬を走らせた

「ぎゃあ~~~~、振動が、きもちわるいいいいいい」

道中アホな青年の叫び声がした

それを空から一匹のドラゴンが追っていた

「じぬがどおほっだ」

鈴男は満身創痍だった

初めての乗馬体験、しかも長距離、相当つらいものである

「もつ、これぐらいいたいたいことないでしょ、それよりあんなに後ろで叫ばれてた私の身にもなつてよ」

後ろですつと叫ばれてたルイズも相当参っていた

「それでここが街？」

「そつよ、どつ？ あなたなんか来たことないでしょ、王都よ」

「王都？、ふ〜くん、やっぱりRPGの世界だなあ」

「あら、この人の多さ街の華やかさを見ても驚かないのね、もしかしてあんだ都会出身？」

「都会といえは都会かな、ここよりは都会かなあ」

どつせバカの戯言と聞き流すことにした

ここは王都、ガリアやゲルニアの首都と勝にも劣らない発展がある

「ここより栄えてる場所などないはずだとそつ思ったからである

「こつちよ、この路地裏に確か武器屋があったはず」

そついいツカツカと人ごみの中を進んでいく

鈴男はそれにおいてかれないように必死についていく

やっとの思いで一軒の武器屋についた

「へい、らっしやい、これは貴族のお嬢様、今日は何をお求めで」

「ちょっと、従者に剣を持たせたいの、何かいいはない」

そうですね、ちょっとお待ちを

そついい奥に入つていった

その間鈴男は店内を物色していた

壁や棚にはRPGでおなじみのありとあらゆる武器が取り揃えてあつた

そこで樽の中にある一振りの剣に目がいった

「貴族様これなんかいかがでしょうエキユー金貨で2千、新金貨で3千

少しお高いですが、ここ見てくださいゲルマニアのさる有名な錬金術師が鍛えた剣でございます

その一太刀はすべてのものを両断します、そしてこの神々しいまでの飾り細工

貴族の従者様が持つにこれ以上のものはございません」

「2千!!、家を買えといつの私に」

あまりもの高さについ叫んでしまった

「いや、面白いさすがRPGだあ」

そつ後ろから声がした

「おお〜お前、そんなバカそつな顔して使い手か」

どつやら剣としゃべっているようだった

ついにバカな頭が焼つ切れたのかと心配したが

「ああ〜、そりゃインテリジェンスソードだ、でもよお、口が悪くて誰も買い手がつかないんでさあ」

「おつお前俺を買え、そんは損せねえぜ」

見るからに錆付いてはいるが刀身自体はしっかりしていて頑丈そつだった

「ルイズ、こいつが欲しい、僕は桜崎鈴男、君名前は？」

「おつ、俺の名前はデルフリンガーっていうんだよろしくな」

「ちょっと勝手に決めないで、せめてその隣のしゃべらないやつにしなさい」

「いや、僕はこいつに決めた、なんか運命を感じる」

「もうしょうがないわね、店主おいくら？」

「あ、あれをお買いで？まあ、結構ですがこちらとしてもいい厄介払いになるので百で結構ですあ」

そついわれルイズは支払いを済ませ店を出て行った

「あら、ダーリンあんな貧相な剣しか買ってもらえなかったのかしら」
ルイズたちが武器やから出てくるのを外で見張っていた人物たちがいた

キュルケとタバサである

先ほどギーシュを圧倒的に倒した鈴男に惚れたキュルケ

休日にルイズと鈴男が出かけるのを見て後を付けてきたのだった

ちなみにタバサは足に使われた

「でも、あれはすごい剣」

タバサがボソッと言った

「へ、あんなおんぼろそつな剣が

「得体の知れない力が付与されてる」

「そつ、なら私はダーリンにもつといいマジックアイテムをプレゼント
トしなきゃ」

そついい、市場に消えていった

タバサも後を追うように消えていく

「デルフリンガー、デルフリンガー……」

「おいおい、相棒何考えてるんだ」

「いや、長ったらしいから何かいいあだ名はないかなってね」
ルイズの部屋で鈴男と剣デルフリンガーがしゃべっていた
「ちょっと、うるさいわよ、あんたたち」

「デル、お前がうるさいから、ルイズに怒られたじゃないか」

「おいおい、お前さんが具だららないこと考えるからだろ」

「っておいデルって俺のあだ名か、なんかひねりもねえなあ」

「うるちいっつてるでしよっ」

バン

「ダーリン、愛しのダーリン、これを受け取って」

扉をいきなり開け放てキュルケが入ってきた

その後ろにはタバサもいた

「これ、ダーリンのために買ってきたの、そんなヴァリエールの買った安い剣よいいもつといいものよ」

そつ言い渡されたのは服だった

「これはエルフを狩るという勇者一行の服らしいわ、見て、この力強い雰囲気」

「強力な耐火魔法がかかっている…、あと未知の呪いも」

タバサが補足する

「へえ〜、ありがとう、早速着てみるよ」

ずつとジーパンとTシャツといういでたちだったので

喜び勇んで着替える

「ちよつとツエルプストーの施しなんか受けないで」

そついいルイズが乱入してきた

「何よ、ルイズ、私と彼の恋を邪魔する気」

「何が恋よ、あなたが勝手に迫ってるだけじゃない」

「彼の喜びようを見てみなさい」

「それはこいつがただバカな犬だから、物をもらって喜んでるだけ」

ルイズとキュルケのいいあいをよそにタバサに手伝ってもらいながら

勇者の服を着た鈴男だがサイズがあまりにも大きすぎるためとても着れたものじゃかった

「カレーはどごだああああ」

着た瞬間いきなり騒ぎ出した鈴男

「エルフはどこだ、見つけたらぬが〜〜す」

それは服を脱ぐまで続き、ルイズとキュルケの言い合いもさらにヒートアップ

翌日先生方に怒られてしまった

「え、シエスタがいない」

せっかくもらった服をサイズ直ししてもらおうとシエスタの元に訪れた鈴男

しかし、厨房にシエスタの姿はなく、その場にいた厨房長マルトーさんに聞くと

「そうかお前は聞いてなかったのか、あいつはなあ、く〜っつ〜」

心底悔しそうにマルトーは語った

「女好きの貴族がな、この間たまたまこの学園を訪れたときにシエスタを一目見て気に入っちゃったんだと

最初のうちは学園も断っていたんだが上から圧力がかかって今日いっっちゃまったよ」

「くそ、貴族がなんだ、平民が」

この世界に来てできた最初の友達がさらわれた

この事実には言い知れようのない怒りを感じた鈴男

「マルトーさん、その貴族の屋敷はどこですか」

「デル、これからやることは黙っておいてくれないか」

あれから少ししてから森の中でデルに向かって話しかける

「おう、娘っ子を助けに行くんだろ」

「ああ、それと僕のもうひとつの力を使っ」

「もうひとつの力？」

「変身」

「おでれ〜た、にし手も間抜けな格好だな」

「いくぞ、相棒」

そういい真っ赤なマントを翻し青い鎧が夕焼けに照らされながらかけて行った

「ふふふ、かわいい、小羊ちゃん」

半裸のでっぷりふとったおっさんが

ベットの上に縛られて口をふさがれたシエスタの元に近づく

「さあ、夜は長いたっぷり楽しもうねえ」

ドン

おっさんがシエスタに迫る前に天井を破り何かが落ちてきた

「ふははははは、株式会社オタンコナス製造超汎用型パワードスーツ
ドッコイダー

可憐な少女を助けるため異世界の荒波に負けずただいま参上」

「何打貴様は、ここが貴族の屋敷と知ってのことか」

「可憐な少女を誘拐するとは許せない正義の鉄槌を下す」

「貴様も不憫だったなそんな少女のためにこのトライアングルメイジ
様のところにくるとは」

そついい杖を取り出した

「死ぬがいい」

そついつと鈴男に向かって氷の矢が放たれた

「相棒、俺を抜け」

背中デルが叫んだ

すぐさま鈴男がデルを抜き矢を切り落とした

「ぐぐ、貴様やりおるな、しかし、これでしまいだ」

鈴男を中心に空間が凍ろつとしていた

「おおお、私の正義の心は決して凍りはしない、おおおおおおお」

「相棒、いいぜいいぜ、いい感じに心が震えてるぜ、おおおおお」

中段で構えられたデルの刀身が輝きだした

パリン

枷が外れたような音がした

一瞬の閃光の後デルの刀身は今までのさび付いたものではなく
光り輝く物となった

「思い出したぜ、行け相棒、俺を振るえその心の震えのままに俺を振るえ」

「ぬおおおお、必殺スペシャルダイナミックエキセントリック峰打ち」
鈴男が一気に間合いを踏み込んだ

貴族の体を剣戟が一閃した

「悪は滅びた、少女よ私に捕まりなさい」

「…様、どうかなさいましたか」

騒ぎを聞きつけようやく護衛のものが現れた

「貴様、何者だ」

窓からシエスタをかかえ逃げ出そうとしている鈴男に向かって
いった

「私の名はドッコイダー、さらわれた少女、確かに返してもらった、ふははははは」

そついい窓から飛び降り赤いマントを翻し夜闇を駆けていった

「少女よ、ここまで来ればもう安心だ」

学園の前までくると彼女をおろした

「あ、あの。ドッコイダー様」

「もしまたなにかあった時は私の名を呼びなさい、さらばだ」

そついい颯爽と去っていった

「ドッコイダー様」

シエスタは自分の窮地を救ってくれたヒーローにうつとりしていた
た

「シエスタ〜、シエスタ〜」

後ろから彼女を呼ぶ声がして振り返ると

「シエスタ〜」

のんきな顔をした青年がやってきた

「鈴男さん、どうしてここに」

「いや、シエスタが攫われたってきいて夜中にこっそり助けに行こう
としたら」

「あ、ありがとうございます、でも、ドッコイダー様に助けてください

て」

「そう、ドッコイダーに、よかったね」

そこからシエスタはいかにドッコイダーがかっこよく助けてくれたのかを語りながら学園に帰っていった

翌日、トリスティンはドッコイダーの話題でもちきりと思っていた
鈴男だが

あの貴族が昨夜のことを恥と思い緘口令を敷いたらしく

まったく持って話題にもならなかった

しかし、人の口に堰は立てられなくドッコイダーのうわさが
いつの間にか平民のヒーローとして囁かれていた

「あ、よかったら、シエスタこれ仕立て直してもらえる、それとカ
レーって知らない？」

事は風を最強の系統と称するギターの授業にコルベールが乱入したことから始まる

「皆さん、姫様がいらっしやいますぞ、出向かいの準備をしなさい」

この一言で生徒たちは浮き足立つ、

さらにルイズたちの学年は二年生

この間召還したばかりの使い魔達の姫様への初御目見えが催される

「といつこと、あなた何か芸出来ない？」

ルイズの唐突の難題に頭を抱えてしまう鈴男

頭を抱えすぎてひっくり返りそうになったとき

「あ、あった」

そついいジープンのポケットから100円硬貨を2枚出した

「今からこの硬貨を3枚に増やします」

といい、指先で硬貨を高速でこすり合わせる

「うわ~~~~、す~~~~い、3枚に増えた~~~~・・・、なんていう
と思ったか

「このあんばたん」

どこからともなくハリセンを取り出し鈴男の頭を強打した

カポ~~~~ン、実にすばらしい空洞をたたいたような音であった

「は〜、そつよね平民なんかのあんたに姫様を喜ばせるような芸を期待するのは無理よねえ」

ルイズは落ち込むとともに、打開策を検討しはじめた

苦悶するルイズをにおいて鈴男は調理場に来ていた

「おお〜、我らが剣よ〜〜」

それを調理場の主マルトーが迎えた

鈴男はギーシュとの決闘の勝利後、その腕を誇ることもない謙虚さ

を

マルトーに気に入られた鈴男は、よく彼にまかない料理ももらって
いた

「飯にはまだ早いが、何の用だい？我らが剣よ」

「シエスタ、どこにいるか知りませんか？」

「あゝ、あの娘なら、洗い場の方にさつきいったぞ」

「ありがとうございます」

「おう、また夕食時にでもきな」

足早に洗濯場に向かっていった鈴男

目的の彼女はすぐ見つかった

「おゝい、シエスタゝゝ」

水洗いしていた彼女は鈴男の声に気づき

手を止めて振り返った

「あ、鈴男さん、ちょっと待ってください、もう少しで一区切りがつか
ますから」

そう言い、作業を再開した、鈴男はそんな彼女の隣に来て

「それで、最後だね、干すの手伝つよ」

「あ、本当ですか、ありがとうございます」

最後の洗濯物を洗い終えたシエスタと仲良く洗濯物を干し始めた

「いつも手伝ってもらってすみません」

「いやゝ、いつもご馳走いただいたしてるしね」

「ご馳走だなんて、ただの賄いですよ」

「あはあは、義妹の料理食べさせたいよ」

「え、妹さんがいらっしやるんですか？」

「あゝ、故郷にね」

くだらない雑談をしながらあっという間に干し終えた

「そついえば、私に何か用だったんですか？」

仕事を終え中庭のベンチで休んでいる二人

「そうだった、この間頼んだ服もつ出来てる？」

鈴男はキュルケからもらったぶかぶかの服をシエスタに仕立て直

してもらっていたのである

「あ、出来てますよ、あとでお部屋のほうへもって行きましょうか？」

「よかった、助かるよ」

「いえいえ、お安い御用です」

楽しそうに話す二人

バシッ、バシッ、

乾いた音が二人に、鈴男に近づいていた

「へえ、主人様が頭を悩ませているときにあなたはこのメイドといちゃいちゃ、ふふふん」

いきなり二人の前に現れたルイズは明らかに不機嫌なオーラが染み出ていた

「ル、ルイズ、いちゃいちゃ、なんかしていいないよ」

ルイズのオーラに気圧されている鈴男

「あの、鈴男さんは私の手伝いをしていただけで・・・」

シエスタがフォローを入れるが

ドカバキグシャ

わずか一コマでポロポロにされて襟首を引っ張られながら連行される鈴男

ムネカ、ムネガソソナニ、タダノシボウ、ブツブツブツ

ルイズはなにか呟きながら去っていった

「とーとーとーで、これを着なさい」

そういつてなにかポロポロの着ぐるみのようなものを鈴男に渡してきた

当然、空っぽの頭では何もわからない鈴男

首を傾げすぎて一回転しそうになっていた

「もう、ホント、バカね、芸よ、芸、これを着て犬のマネをするの」

「あ、芸ね、それならね」

コンコン

「すみません、シエスタです、鈴男さんいらつしやいますか？」

「ちようどよかった、シエスタ、ルイズちよつと待つてて」

そつ言いドアへ向かった

「ありがとう、今度なんかお礼するよ、じゃ、またね」

戻ってきた彼の手には先日キュルケからもらった服があった

「僕のいたところでね、サーカスってのがあるんだけど、その中で火の輪くぐりってあって」

「知ってるわよ、サーカスの火の輪くぐりか、いいわね」

「それでね、これ耐火魔法がかかっているか」

「ええ、いいわね、ただ犬のマネしてもつまらないものね」

といいまた着ぐるみを差し出してきた

「へ、いや、だから、これを着て」

「そんなのでやるよりこつちでやったほうが受けるでしょ、第一」

ルイズが語気を強めた

「ツエルプストーからつけた施しを使うだなんて、ありえないわ」

「いや、でも、それじゃあ、焼けどしちや」

「つべこべ言わない、犬は犬らしく、犬のマネなさい、さあ」

「は、はい、直ちに」

いそいそと犬の着ぐるみに着替えた鈴男

その地獄の特訓は夜通し続いた

ワオ~~~~~ン

「あ、私の出番は？」

ルイズの部屋に入りたくても入れないアンリエッタが部屋には入れたのは

一時間後のことであった

「続きましてはルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢と

使い魔サクラザキ・スズオです」

名前を呼ばれて舞台上にルイズの姿が現れる

その手には鎖が握られておりその先にはボロ雑巾のようになった鈴男がつながれていた

「オスワリ、オテ、オカワリ」

ルイズが次々と命令をしていく

しかしその様子は滑稽であり観客の失笑を買っていた

鈴男も淡々とこなすが野次が飛び始める

耐え切れなくなったルイズは礼をして舞台袖から出て行った

「もう、なんでこんな使い魔召還してしまったのかしら」

舞台から逃げるように後者の裏側に来た二人

「いや、あの3回まわってワン、なんて綺麗に決まったと思うんだけど」

最初はいやいやながらだったものの一晩もやらされて技に誇りのようなものが出てきてしまっており

一人で悦楽の世界に浸っていた鈴男だったがいきなり

何かにつかみ上げられてしまっていた

「物理攻撃なら破壊できると思ったんだけど、おやおや、見つかったね」

ゴーレムの頭上のフードをかぶった人物が呟いた

「さて、いつを人質に逃げさせてもらうかね」

学園の壁から離れていくつとすると

「ちょっと、私の使い魔を離しなさい」

そついい、ルイズが杖を構えた

「ファイヤーボール」

杖の先から魔力がほとばしり

ゴーレムの腕付近で爆発が起きた

「ふん、それがファイヤーボール、そのどこが魔法だい」

ルイズの失敗魔法を見てフードの人物が笑った

と同時に爆発の影響が外壁が割れた

「おや、今頃になって割れたか、それとも・・・、まあいい、目的のものはいただくよ」

そういい、フードの人物は外壁の穴から中に進入した

ルイズは未だ捕まったままの鈴男を助けようと何度も魔法を使う

しかしどれも命中には至らない

穴からまたフードの人物が現れて

「破壊の像はこの土くれのフーケがいただいたよ、あばよ」

そう言うと同時にゴーレムは大きな音を立てて崩れて大きな砂埃が発生し姿が消えた

異変に気づいてみんなが集まりだしたのはそれからすぐのことであつた

「それでフーケに逃げられてしまったのじゃな」

学園長室で事件の唯一の目撃者であるルイズから学園長が問うた

「はい、申し訳ありません、私が至らぬばかりに」

ルイズは申し訳なさそうに頭を下げた

「いや、それは仕方がない、相手は名つての盗賊、しかも風のトライアングルだ

一介の生徒がどうのこうの出来るような相手ではない」

落ち込むルイズにやさしく言葉をかける

「あ、あの、私にフーケの討伐任務やらせてください」

意を決したかのように言い放った

彼女はゼロのルイズと呼ばれる生徒、生徒をみすみす危険に

さらすようなことが出来ないがその決意を無碍には出来ないと言
園長が悩んでいると

バンっ!!

扉を勢いよく開けて鈴男が出てきた

「ぼくも行きます、逃がした責任は僕にもあります、だから、やらせてください」

深々と頭を下げる鈴男

「うむ、そうじゃのう、その扉の向こうに隠れてる二人も協力してくれるのかな」

そういわれて扉からおずおずとキュルケとタバサが出てきた

ルイズは二人が出てきたことにびっくりした

「な、なんであなた達がここに」

キュルケがルイズの頭を軽くたたいて

「もう、友達が困ってるのよ、助けるのが当たり前でしょ」

その顔は優しい微笑みに包まれていた

「あ、ありがとう」

照れくさそうに感謝の言葉を言った

「ほ、ほ、これで役者はそろったのう、あとは」

そう学園長が言つと同時に扉からミス・ロングビルが現れた

「学園長、フーケの居場所がわかりました」

ルイズ、鈴男、キュルケ、タバサ、ミス・ロングビルをのせた馬車
が

森の中を突っ切っていく

「あ、あのね、みんなついてきてありがとう」

ぼそぼそとルイズが言った

「もう、ホント水臭いんだから、大丈夫よ、私とタバサ、それにあなたの使い魔

鈴男がいれば百人力よ、安心なさい」

「貸し」

タバサがボソつと言った

「ええ、いつか必ず返すわ」

女の子二人は友情を温めていた

「で、ミズ・ロングビル、フーケはこの先に」

鈴男が馬車を運転するミズ・ロングビルに話しかけた

「ええ、地元の方の話だとフードの怪しげな人物がこの森の奥の小屋に向かったと」

鞆からデルフが出てきて

「へん、盗賊の一匹や二匹、この俺様にかかれば一撃よお」

目的地に着くまで皆士気を高めていた

「ここがフーケの潜伏先？」

ルイズが物陰から声を潜めて言った

「人の気配は、ない」

タバサが魔法で確認した

その一言を聞いて鈴男が小屋に向かう

「ちょっと、ダーリン、畏かも知れないのよ」

忠告も聞かずに小屋の扉に手をかけ、開け放った

皆身構えたが、何も起きなかった

「畏はなかったようですね」

ミズ・ロングビルが恐る恐るつぶやいた

安全を確認し皆小屋の中に入った

中は特に変わった様子もなくというよりは

人の気配などなくフーケがアジトに使っていた形跡すらなかった

「ガセをつかまれたのかしら」

残念そうにキュルケがつぶやいた

しかし、ベットの下からタバサが何かを引きずり出した

「多分、これ」

一同がその引きずり出された箱に視線を集める

ドガーン

外から大きな物音がした

鈴男がいち早く外に出た

そこには学園で見たゴーレムが暴れていた
すかさずデルフを抜いた

「ちよっと、帰って来ちゃったんじゃないの」

キュルケがでて来て魔法で応戦しようと杖を構えた

鈴男がゴーレムに向かって飛び込んでいく

それを援護するようにキュルケが魔法を放つ

いつの間にかタバサも出て来きており

ピーー

大きな口笛を吹いた

まもなくどこからともなく大きな風竜、彼女の使い魔シルフィード
が現れた

「乗って」

タバサの声に促され皆、シルフィードの背に乗り移った

ルイズは見つけた箱を抱えながら自分の無力さを改めて痛感した
皆が空に避難するために地上で防戦をしていた鈴男だったが
避難を終え安心し隙が出来た

そこにすかさずゴーレムの一撃が叩き込まれた

鈴男の体はぼろきれのように森の中へ飛んでいってしまった

「ちよっと、ダーリン、すぐ助けに行かないと」

キュルケが鈴男の身を案じる

「危険、今は近づけない」

タバサが冷静に判断する

「もう、何が 破壊の像 よ、こんなものがなければ」

ルイズが焼けになって像の入った箱をゴーレムに投げつける

箱がゴーレムに当たって中から像と思しきものがでてきた

それをすかさず何者かがキャッチした

赤いマントを翻しゴーレムの前に立った

「株式会社オタンコナス製造、超特殊汎用パワードスーツ、盗賊退治の
為ただいま参上」

像を小脇に抱えながらそう名乗りを上げた

「あ、あれがドッコイダー？、この間モット伯の屋敷で暴れたって言う」

キユルケは興味深々そうにそういい、またタバサも静かに興味を示していた

ルイズはいきなり現れた人物に圧倒されていた

ドッコイダーにゴーレムの拳が迫る

しかし、彼は避けようとせずただ右手を伸ばしそれを止めた

「エーデルのゴーレムの方が何倍も強い」

そう言いその拳を押し返してゴーレムをひっくり返した

そしていつの間にか高い木の上上がり

「止めだ!! スーパーデリシヤスダイナマイトキック」

空中で回転をし勢いを加えたキックがゴーレムに命中するはずが

ゴッソ

いつもどおり頭が命中した

その一撃を受けゴーレムは崩れ去った

全員がその圧倒的な強さに呆然とした

シルフィードが地面に降りてルイズ達も降り立った

そこにドッコイダーが歩み寄ってルイズに像を渡した

「お嬢ちゃん、大事なもの手放しちゃ駄目だよ」

そう言い森の中に走り去っていた

全員が呆然としていると

森の中からミス・ロングビルが出て来た

「フーケはいなくなりましたようですね、よかったです、

怖くて隠れていたんですけど皆さん、お強いですね」

そう言いながらルイズに近寄っていった

「これが、破壊の像？ 特に魔法的な力は感じませんが」

像を手に取り訝しげに観察し、一呼吸して

「オラ、動くんじゃないよ」

その言葉と同時にルイズを人質にとりその首に短刀を押し付けた

一同はあまりの自体の連続に頭がフリーズしてしまった

「あなたがフーケだったの」

キュルケが辛うじて言葉をひねり出した

「はん、犯人がこんなに身近にいるのに気づかないだなんて、

馬車の中で笑いをこらえるの大変だったよ」

タバサが杖を構えようとするが

「おい、この人質が見えないのかい、さあ、杖を捨てな」

そういわれキュルケとタバサは杖を放り投げた

「それにしてもこの像の使い方がわからなくて学園の連中に使わせて探ろうとしたらこんなガキばかり、結局わからずじまい骨折り損だよ」

そう言い忌々しそうに像を見つめる

ルイズはフーケに捕まりながらまた自分の非力さを感じ

鈴男が助けに来てくれることを祈っていた

ゴッソ

フーケの体が急に力を失い倒れた、と同時にルイズは開放された

「ルイズ、大丈夫か」

フーケを背後から昏倒させたのは鈴男だった

緊張の糸が切れルイズは赤子のように泣き出してしまった

「よがった、ぶじでよがった」

ルイズを安心させるため、鈴男はやさしく抱きしめた

そんな彼らを学園長が念のために後を追わせていたコルベールが発見したのはそのすぐ後だった

「皆のものご苦労じゃった、まさかミス・ロングビルがフーケであったとは」

討伐任務の報告を学園長室で行う一同

「ルイズ、キュルケはシュバリエの称号を王宮に申請しておこう、

タバサはシュバリエの称号をもつ持っているので精霊十字勲章の

申請をしよう」

ルイズとキュルケはタバサがシュバリエの称号を持っているという事に驚かされつつも

「あの、鈴男には、フーケを捕まえたのは彼です」

ルイズが食って掛かった

しかし、学園長は悩ましそくに

「貴族でないものには・・・のう」

その言葉に落胆してしまった

自分を助けてくれた使い魔に恩賞がもらえないというのがひどく残念であった

「ぼくはいいよ、ルイズがみんなに褒められるだけで僕はうれしいよ」

「ま、何もしてないけどね」

キュルケが茶化した

「もう、なによ、キュルケの、バカ、バーク」

その光景を微笑ましく見つめる学園長が鈴男に

「恩賞はやれんが何か欲しいものはあるか？ わしに手配できるものは手配しよう」

「では、少し伺いたいことが」

「わかった、今夜は3人の祝勝会じゃ、3人はパーティーの準備をしなさい」

そつ言い部屋から鈴男以外の人間を人払いした

「で、聞きたいことはこの像のことかな」

「はい」

「これは、わしが若いころの話じゃ」

若き日のオスマンは走っていた

森の中でワイバーンに出くわし追われていたのであった

今の力量なら難なく退治できたが当時はまだ駆け出しで

逃げることにしか出来なかった

そんな時一人の男とであった

その男も追われているようで体から血を流しながら這いずりなが

ら

必死な顔で森の中を歩いていて

このままではワイバーンの餌食になると思い、一緒に逃げようと駆け寄った

しかし、男はそれを拒むように手を振った

背後にワイバーンがいるのが見えると

意を決したように懐から一つの像を取り出した

その像に男が念をこめるとそれは何十倍も大きくなり

ワイバーンと対峙した、決着はあっという間だった

像に一撃をもらったワイバーンは首を折られすぐに命を絶った

オスマンは安全になったので命の恩人の治療をしよう改めて彼の体を見たが

傷は深く、到底治療の出来るものではなかった

ただ、安らかに彼が眠れるようにと祈るしかなかった

いつしかオスマンの目には涙があふれていた

命を助けてくれた感謝の涙とその恩人を救えなかった無念の涙が

そんなオスマンを見て彼はうれしそうに笑っており

いつの間にかその手には先ほどの像が握られており

像をオスマンに託すように押し付け・・・

「それからワシはこの像を王宮に破壊の像として謙譲しこの学園に預けられたというわけじゃ」

話を聞いた鈴男は安堵していた

”破壊の像”を見た瞬間エーデルワイスのねんど人形を思い出してしまった

しかし、話の中の人物は男少なくともエーデルではない

「ありがとうございます」

そう言い、部屋を去ろうとする鈴男に学園長が

「ワシにできることがあったらいつでも言ってくれガンダールヴよ」
と声をかけた

パーティーは中々盛り上がっていた

ルイズは一人でテラスで夜風に当たっていた

「お嬢ちゃん、お一人ですか？」

ふと、声をかけられた

「いえ、人を待ったるんだけど、あいつ来ないのよ」

「ふ〜ん、そうなんだ」

そういい、鈴男はルイズの隣に並んだ

「そういえばあんた、いつから戻っていたの？」

「いや〜、すぐに戻ってきたんだけど、あのドッコイダーってのが出てきたでしょ」

出るタイミングを失ってしまっ

「あっそう、助けてくれてありがとう、でも二度とご主人様に心配させるんじゃないわよ」

そういい鈴男に向けて手を出す

「ほ、本当は男のほうから誘わないといけないんだからね」

「では、可憐なお姫様、ボクと一緒に踊ってもらえますか？」

二人は音楽に合わせてぎこちないながらダンスを始めた

楽しい夜は更けていく